

# 地震時における防災科研 Hi-net web ページアクセスの特徴(2003 年)

## The feature of access rate to NIED Hi-net WEB page

# 松村 稔[1]; 犬塚 直樹[2]; 小原 一成[1]

# Minoru Matsumura[1]; Naoki Inuzuka[2]; Kazushige Obara[1]

[1] 防災科研; [2] FASOL

[1] NIED; [2] FASOL

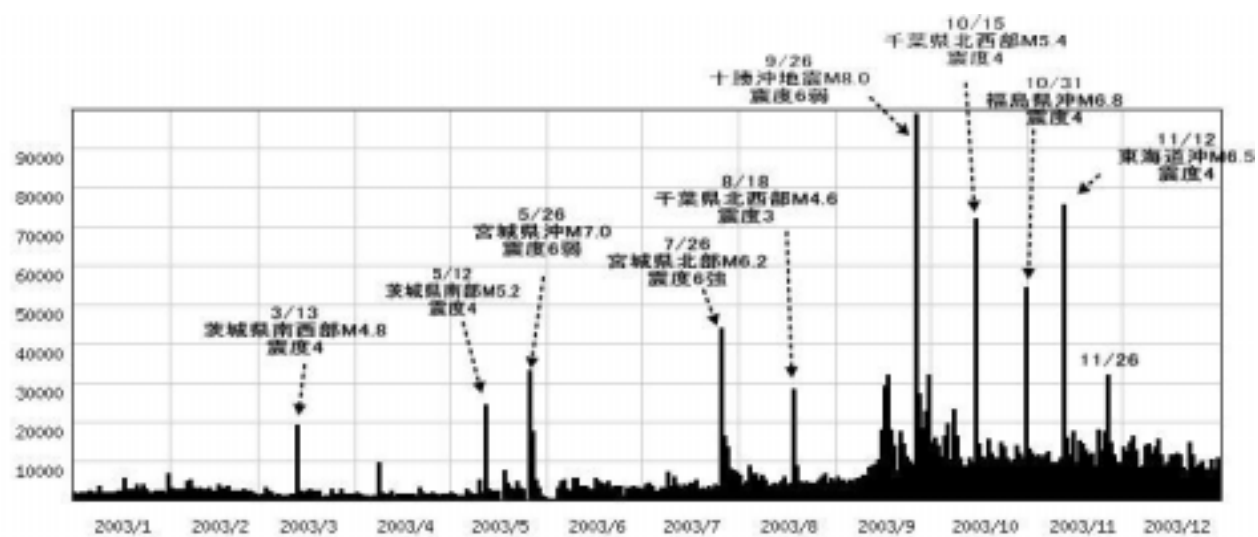
<http://www.hinet.bosai.go.jp/>

防災科研 Hi-net では、政府の地震調査研究推進本部の方針に従い、高感度地震観測データの幅広い利用を目的として web サイトを開設している。そのコンテンツの 1 つとして、各種自動処理に基づく震源情報の即時公開を実施しており、早ければ地震発生から 1 分以内に震源情報を発信している。また、大地震発生時には特集ページを設け、防災科研の他の地震観測網による結果も含めて様々な情報公開を行っている。これまで当 web ページを運用してきた過程で、地震時のアクセスに幾つの特徴があることが判ってきた。その 1 つとして、最大震度が 2 程度の地震であっても、東京・大阪などの人口集中地域で有感になった場合には、早朝時間帯を除き、非常に短時間の間にアクセス数が劇的に集中する事が挙げられる。2003 年 10 月 15 日 16 時 30 分に千葉県中部で発生した最大震度 4 の地震では、トップページへの 1 分間あたりのアクセス数が 16 時 31 分の段階ですでに約 3500 に達し、地震発生 7 分後に最大ピーク (4700 アクセス) を記録した。2003 年十勝沖地震の際に記録した 1 分間最大アクセス数約 900 と比較すると、その約 5 倍ものアクセスレートを記録している。また、2003 年 10 月 8 日 23 時 35 分には、兵庫・大阪等で最大震度 2 の地震が発生したが、その際の 1 分間最大アクセス数は、十勝沖地震の際の約 2 倍に相当する 1500 に達している。関西地方は定常的に地震が少ない事に加え、兵庫県南部地震の体験から、有感地震に対する関心がかなり高いからかも知れない。このような大都市圏での有感地震の際のアクセス集中は、早朝時を除き、地震発生後数分以内に激増することが多く、恐らく揺れを体感して即座に web アクセスをしているものと推測され、インターネット常時接続の環境が定着して来た事、およびパソコン等の普及が進み、端末を即座に利用できる環境が一般的になってきた事を表していると思われる。したがって、これら大都市で大きな被害を被る地震が発生した場合には、かなりのアクセス集中が予測され、場合によってはネットワークそのものが麻痺する事も考えられる。防災情報を発信する web サイトではこの点を十分考慮に入れて構築する必要がある。

一方、2003 年十勝沖地震をはじめ、同年の宮城県で発生した 5 月、7 月の地震の際には、ピーク値こそ前述の例の有感地震には及ばなかったものの、アクセス集中は長時間にわたって持続していた。一日あたりのアクセス数では、十勝沖地震の発生した 9 月 26 日に約 9 万 6 千を記録し、2003 年の中では最大であった。Hi-net web ページの 1 ヶ月あたりのアクセス数は、昨年 4 月までは、5 万 ~ 10 万であったが、大きな地震が相次いで発生した 5 月から 9 月にかけては、10 万 ~ 40 万と増加した。しかし、目立った地震のなかった 10 月、11 月に

於いても 47 万および 39 万を記録している。これは、FM 電波による地震予知情報が公開されたことと、一部マスコミによって、11 月末に大地震発生の可能性がある」と報じられた事により、一般市民の地震への関心が非常に高まっていた為であると思われる。

図 1 には、2003 年 1 年間における、毎日の Hi-net web トップページアクセス数と地震との関係を示した。



防災科研Hi-net webページ日別アクセス数(トップページ)